

戸川猪佐武

小説吉田学校

第二部 党人山脈

小説吉田学校（第2部）党人山脈

昭和47年3月10日 初版発行（5版）

昭和49年6月20日 改裝 初版発行

昭和49年7月22日 改裝 2版発行

著 者 戸 川 猪 佐 武

発行者 倉 林 公 夫

発行所 （株）流 動 東京都港区芝愛宕町 1-3（第9森ビル）

電話／03-433-7461 代 振替東京 107534 ㊤ 105

印刷／新日本印刷（株） 製本／徳住製本（株）

< 検印省略 >

0093-0013-8942

万一、乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

戸川猪佐武

第二部 党人山脈

小説吉田学校



小說吉田学校

第二部
党人山脉

／ 目次

狸穴からの使者——ドムニツキイの登場——7

顔を歪めた外相——二元外交はじまる——29

閣議は踊る——日ソ交渉全権決まる——47

保守合同の狼火——三木武吉の爆弾談話——67

ロンドン・東京・ワシントン——重光のひそかな野心——119

クレムリンの魚——河野、モスクワに乗りこむ——143

巨星三木武吉死す——策士大麻の暗躍——177

モスクワへの遠い途——日ソ共同宣言の締結——200

運命の七票——岸、石橋に敗れる——239

騒乱の前夜——警職法改正もめる——268

安保は燃える——岸内閣退陣へ——311

寛容と忍耐への出発——池田と河野の間——333

三人の実力者——池田から佐藤へ——354

あとがき——381

装 幀
村 上
豊
さしえ
鶴 田
幹

狸穴からの使者

——ドムニッキイの登場——

1

あとにもさきにも、これまでただの一度も、そのソ連人の名前を、耳にしたことはない。いま聞かされたのが、はじめてである。彼らスラブ系の姓名は、アングロサクソンのそれとは、だいぶ語感が異っている。耳慣れない日本人には、たしかに覚えにくい……鳩山一郎首相は、訊きかえないわけにはいかなかった。

「……その男の名、なんといったかね？　もう一度、いつてくれたまえ」

この話を持ち込んだきた馬島偶が、ひとつひとつをほぐすように、ゆっくりとくりかえした。

「ドムニッキイ……元ソ連代表部の臨時首席です」

「そうドムニッキイか……」

鳩山はうなずいてから、あらためて馬島の話の件をただした。

「その人物が、私に会いたい……というのだね？」

「はあ、そうです。是非……といっております」

馬島と鳩山とは、古い友人である。ただし彼は政界の人間ではなく、医学博士だ。サンガー夫人が提唱した産児制限を日本に紹介して、その運動に打ちこんでいたことで知られている。産児制限は、その時代には社会主義運動との関連において展開された。軍部、官憲から、馬島は弾圧を受けた経験がある。それでもなお、節を枉げなかった——という一徹なものが、たったいまのこの場面でも、馬島のなかにみなぎっていた。

「総理……なんとしても、このさい、ドムニッキイに会っていただかねばなりません」

馬島は、勢いこんだ口調になっていた。

「といってもです。私が、長いこと、日ソ親善につとめてきた。そこでドムニッキイから、総理との会見のアレンジをたのまれた……というだけで、強いて押しつけようというんではない。ドムニッキイが日ソ国交回復について、ソ連政府の正式意向を、直接、総理につたえたい……といつとるからです。日ソ国交回復は、あなたの内閣の看板で、それには打ってつけの話と思うからです……」

力をこめて、馬島は鳩山の説得にかかった。

鳩山が、その当時にあつては不名誉な、自由主義者という烙印を軍部、官僚から押されて、議会の片隅に閉じこめられていた太平洋戦争の時代を通じて、馬島はいっそう鳩山と打ち解けた友

人になっていた。

そんなあいだがらではあるにしても、現在の鳩山は、首相である。ことは個人的な事件や、さやかな陳情とは違う。国家の外交上のことである。鳩山が軽々に返事をし、動ける問題ではないと、馬島もわきまえている。だからこそ、馬島はなおいつそう、鳩山にドムニッキイとの会見を承諾させようと、話に誠意と熱意とをこめているのだった。

それに馬島には、もうひとつおおきな懸念があった。実は、このドムニッキイの件は、すでに日ソ親善協会の尾形昭二、民主党参議院議員の杉原荒太とともに、外務省の谷正之顧問、加瀬俊一参与のところに持ちこんだ経緯がある。

そのときは、ドムニッキイは「外相に会いたい」という意向であった。外相の重光葵も、側近の谷や加瀬も、外交慣例をたてに、「正式な国交もなく、まして国際法的な戦争状態にある国家の人間とは会えない」と、頭から拒否してきた。

それでドムニッキイは、こんどは鳩山首相との会見を求めてきたのである。

——一度、外相にことわられているだけに、首相としても承知しにくからう。首相も重光や外務省に気がねして、外務省同様、外交上の慣例や論理を尊重するとすれば、会わないほうがよいと判断するにちがいない。

それが、馬島のもっとも懸念するところであった。

——しかし、鳩山にノーといわれれば、日ソ間の話し合いは、緒口を失ってしまう。どうあって

も、イエスといわせなければならぬ。

そう馬島は、思い詰めながら説明し、返事待った。

鳩山の様子は、日ごろの雑談のときと、なんら変わるところがなかった。馬島の熱気など、まるきり反応しないもののよう映った。いつものおっとりした口のききかたで——しかし、このように答えた。

「いい話じゃあないか。ぼくはいつでも、その……そう、ドムニッキイといったかね、ソ連代表部の首席に会うよ」

それを聞いて、馬島はこれまでの渾身の力が余り過ぎて、とんとんと前のめりするような心理だった。なんとも気軽な鳩山の承諾に、かえって彼は不安を覚えた。

「たしかに、ドムニッキイに、お会いいただけますね」と、だめを押した。

「たしかだとも」

鳩山の返事と態度は、どこまでも、こともなげであった。馬島は、ほっと息をつきながらも、慎重を期した。

「しかし、総理……この件は、外相や外務省には、しばらく内密に願います。万一洩れますと、連中はかならず反対して、会見を壊しかかってきます」

「そんなことは、馬島君、どうでもいいじゃないか。相手のステータス（資格）とか、プロトゴール（儀典）とかは、政党内閣の外交政策には、なんの関係もないよ。ぼくがこうする……とい

う以上、かならずそうするよ」

鳩山は、まるきり重光外相や外務省の反対など、意に介してはいなかった。それは三木武吉民主党総務会長、河野一郎農相、高崎達之助経審長官など、実力者を擁している政党人の自信であった。

と同時に、それは官僚の論理や形式にわずらわされたくないという、鳩山その人の性格からもきていた。昭和のはじめ、田中義一政友会内閣のとき、書記官長（現在の官房長官）であった鳩山は、そのころ日本に入ってきたゴルフに凝りはじめていた。土曜日には、朝からニッカボッカ、ハンチングのゴルフアースタイルで、永田町の首相官邸にきて、ゴルフ靴で赤じゅうたんを踏み歩いた。

ゴルフに出かけて、閣議をすっばかすことさえあった。「おらが大將」といわれた陸軍大將の田中首相もさるもので、

「ゴルフちうもんは、そげん面白いもんかのう」

というだけで、鳩山になにひとつ文句をいわなかった。

そんな鳩山の天衣無縫さが、ときによって官僚に乗ぜられたり、党人に謀られたりする危険を、馬島も知っていた。いまの場合も、それを憂慮した。かといって、あからさまに、——あなたは人がいい、坊ちゃんでもある、重光はじめ外務省に、してやられはしませんか？——とはいえない。

「ことが壊れませんように、用心に越すことはありません。ドムニッキイに会うまでは、極秘に願います」と、馬島はいいおいて席を立った。

彼が、文京区音羽の高台にある鳩山邸を出て、車に乗り込んだとき——昭和二十九年（一九五四）という年は、もう余すところ一時間半しかなかった。十二月三十一日午後十時半であった。残されている気象庁の記録によれば、その日その時間の東京は、平均気温七・三度の快晴で、例年より温くおだやかな大晦日だった。鳩山邸を出て、その高台から見える夜空の一面の星も、きびしい冬のそれではなく、どこか春じみていた。

2

馬島が去ったあと——鳩山首相が、薫子夫人に命じたのは、三木武吉と河野一郎に電話することであった。この二人の実力者にドムニッキイの件を知らせようと、思い立ったのだ。といっても、事前に了解を求めるといのではない。二人とも、戦前からの同志である。戦時、戦後を通じて、政党内としての苦労をともしてきている。こと政策について、鳩山がなにをいおうと、なにをおこなおうと、めったに異論はないはずであった。二人に電話したのは、

——自分が、日ソ国交回復交渉を、外交政策の一枚看板として打ち出したのは、かならずソ連が反応してくると読んだからだ。それがどうだ、組閣後一カ月もたたないうちに、まさしく、的中し

た……。

と、その鼻の高いところを、みせてやりたいという、ある意味では坊ちゃん気質の稚氣が、鳩山につよくはたらいたからであった。

三木は、受話器の向う側で、眼を細めたようであった。

「ほほう……結構なことだ。組閣そうそう、よいお歳暮が届いたじゃないか」

お歳暮などと表現するところ、いかにも老練な、世慣れた政党人らしい三木という人の味が溢れていた。

つぎの河野は、「なに？」とどすのきいた声で、ことの次第を聞くうちに、興奮の度をたかめた。

「総理。私のかんでは、これはものになりますな。その、なんとかいうソ連人、放しちゃあいけませんぜ。あんたが、じかに話し合うべきだ。重光や外務省の奴らに任しておいたんでは、とてもらちはあかん」

「うん、そのつもりだがね。あとあと閣内、党内がごたついたら、よろしくたのむよ」

「なあに、そんなことは……」と、なおもまくしたてようとする河野の電話を、適当なところで鳩山は切った。

鳩山と三木とは、大正年代からの交友である。

二人とも代議士であると同時に、東京市会議員でもあった。市政界では、鳩山は政友会、三木

は憲政会・民政党の雄として、たがいに政敵の位置を占めながらも、政党人として通い合うものをいだいていた。

二人が同志として結合したのは、昭和十七年の翼賛選挙で、非推薦候補として立って、軍部の弾圧と闘い、当選してきて以後のことである。これに、鳩山派の中堅で、同じ非推薦だった河野一郎が加わった。ナチス・ドイツの模倣といわれた最大の戦時立法——戦時刑法特例法案に、中野正剛たちと反対、その闘争に敗れたところで、鳩山、三木、河野の戦前の政治生活はおわっている。

もはや軍部と抗争する術もなく、鳩山は軽井沢、三木は小豆島にこもるために、東京を去った。昭和十八年（一九四三）秋のことである。戦時政治へのあきらめが、二人の訣別を淡々たるものにさせた。議事堂玄関の階段を降りるところで、三木は鳩山にいった。

「……達者でな」

そのあと、こんな言葉が、三木の口を衝いて出た。

「いずれ、戦争がおわったら……かならず、君の内閣をつくってやる……」
にこりと、鳩山は笑った。

「そのとき、君は議長だよ……」

太平洋戦争は、昭和二十年（一九四五）八月十五日に幕を閉じた。戦後の動揺のなかで、鳩山総裁の下に自由党が結党された。翌二十一年（一九四六）五月、鳩山はせっかく組閣の大命を受

